

## 鎌倉における「杉本」の名称の発祥と杉本氏の本拠地について

玉林 美男（文化財課 遺跡発掘調査研究員）

### はじめに

鎌倉市杉本は、三浦一族研究の中で三浦一族の杉本義宗の名字の地として取り上げられてきた。これを基に鎌倉時代直前の鎌倉の支配について、石井進（石井 1986・2022）は『源平盛衰記』「小坪合戦」<sup>(1)</sup>の記事を基に鎌倉の杉本を三浦氏の拠点の一部とし、三浦氏を主体とした鎌倉の支配が考えられるようになった。近年、岡陽一郎（岡 1995・1999）や高橋慎一郎（高橋 2019）がこの論を受けとめ、また岡は杉本寺前で行われた発掘調査成果を取り上げ（岡 2019）、報告者の馬淵和雄の意見（杉本寺周辺遺跡発掘調査団 2002・馬淵 2025）をそのまま受け入れて紹介したため、これが無批判に受け入れられ（真鍋 2005）、源頼朝が鎌倉に入る以前の鎌倉は三浦氏の支配下であったとされている。一方、鎌倉時代初期の鎌倉のまちづくりを大庭景義、その後を梶原景時が担っているため、大庭氏の支配下にあったとする意見（貫 1981・1985）もある。また坂ノ下の御霊神社・長谷甘縄神明社は鎌倉党の、源義朝供養の亀ヶ谷堂と大倉観音堂は三浦党の勢力圏にあったと考える意見もある（押木 2025）。しかし、杉本義宗と名字の地とされる鎌倉の「杉本」という名称について何時できたものであるか、杉本義宗・或いは和田義盛と歴史的な繋がりがある歴史資料があるのかといった検証は為されていない。そこで鎌倉における「杉本」の名称・地名の成立を検証し、合わせて杉本寺の南側に隣接する地点の発掘調査成果の検討を行うと共に、安房国長狭常伴との合戦で戦死した杉本義宗の安房国での活動と「杉本」との関係源義朝による水上交通網支配といった視点から考えてみたい。

### 1. 鎌倉の「杉本」が杉本太郎義宗の名字の地であるとする説の成立

杉本太郎義宗は平安時代末期の三浦半島を拠点とした武士、三浦氏の一族で三浦義明の長男である。『延慶本平家物語』に長寛元年（1163）秋、安房国長狭常伴を攻め、上陸に際して矢を受け、三浦に帰った後死亡したとあり<sup>(2)</sup>、享年 39 歳であったという。

鎌倉の「杉本」が杉本太郎義宗の名字の地であるとする説を最初に唱えたのは、管見の及ぶところでは北村包直である。氏は三浦地域の教育者で、三浦氏を地域の英雄として顕彰するため『三浦大介及鎌倉黨』（北村 1925）を著した<sup>(3)</sup>。この書では三浦氏の拠点を三浦半島から相模国の東南部の地域にかけて紹介し、三浦氏の伝承や記録を基に三浦氏の栄華・武略を地域ごとに解説すると共に物語として著している。杉本太郎義宗については「第二章 三浦大介の勢力 第二節 宗族(其の一)」に「長男義宗は、杉本(鎌倉町=安房豊房村の杉本は其の移稱か)に居て、杉本太郎と名乗り、源家に由緒の深い鎌倉の重鎮として、更に安房経略を企てた。」とし、「第十編 三浦大介及三浦黨の遺蹟 第三章 南部相模 第二節 鎌倉郡其二(鎌倉町)」に「杉本(二階堂)は、杉本太郎義宗が居つた處にて、杉本観音(行基菩薩の作と稱する)堂に義宗身替地藏といふ佛像がある。(七編二章二十五齣参照)」と述べている。

この見解を受け、赤星直忠は『三浦半島城郭史（上）横須賀市史 No. 8』を著し、「第三章 平安時代 第二章 各論 杉本館」において「杉本館 大介の長男義宗は初め怒田館に居たが後鎌倉の杉本に移つたと云う。杉本は鎌倉の東北に位置し、字浄明寺と雪の下との間にある。杉本寺所在地附近の称であろう。杉本寺

のある丘陵は鎌倉末期に城郭として完成せられた杉本城のあとである。杉本館の位置は全く伝えられていないがこの丘陵が杉本城として完備せられる以前、既に万一の場所として選定せられた丘陵であつたに違いあるまい。然らば館は其の麓に選定せられていたとして不可あるまい。」と記し、「第四章 鎌倉時代 第一節 總説 杉本城」では「三浦大介長男義宗が杉本を名乗つ<sup>(マツ)</sup>ているのはこの城の基礎を作つたものであらう」と述べている(赤星 1955)。これに引き続き『鎌倉市史 考古編』を著し、「杉本城跡」の「3 沿革」では「平安末期杉本の地に三浦義明の長男義宗が邸を営んで居住していたと伝えられているが特に城郭として伝えられる地はない。この頃から大倉山の南に観音堂があり、鎌倉末期に大倉山が城郭として完成すると共にその山腹の平場に移された様である」と述べ(赤星 1959)、赤星は現杉本寺の南側の平地(現フレンドリー鎌倉付近)に杉本義宗の館跡を推定している。

この後、昭和 55 年(1980) 10 月には三浦義明没後 800 年を記念して『三浦大介義明とその一族』が刊行され、その中で菊池武は『鎌倉幕府と三浦一族』の「大介義明の後継」で「大介義明の長男、太郎義宗は鎌倉の杉本城(現在の杉本寺の裏山)に居て、杉本氏を称していた」と記している。以後、鎌倉の「杉本」が三浦一族杉本氏の名の地として定着していった。

この見解に対し貫達人は、源頼朝入鎌後鎌倉の都市の基盤整備にかかわっているのが大庭景義・梶原景時であることから、鎌倉の在地領主は鎌倉党であるとの見解(貫 1981・1985)を示した。しかし石井の見解(石井 1986)以降、三浦氏の鎌倉の拠点としての杉本という見解が定着した。

## 2. 鎌倉の「杉本観音」の名称とその成立

貫達人は『鎌倉市史 社寺編』「杉本寺」で「大蔵山杉本寺観音院と号する。大蔵観音、杉本観音ともいう。天台宗。もと宝戒寺末。いま比叡山延暦寺末。天平六年(736)行基の創建、中興開山、慈覚大師。鎌倉の仏跡と伝える。『吾妻鏡』には「是大倉行事草創伽藍也」とある。坂東三十三観音のうち第一の札所である。」と紹介し、『吾妻鏡』によれば、文治五年十一月二十三日夜、大蔵観音堂は失火によって炎上した。時の別当浄台房は火焰の中に飛入り、忽ち無事に本尊を取出すことができた。そして衣をわずかに焦がしただけで、身にはやけどもしなかったという。いわゆる「念彼観音力、火坑變成池(ねんぴかんのりき、かきょうへんじょうち)」とはこの事かと大いに信仰をあつめたらしい。永禄三年書写の「杉本寺縁起」には、この時本尊がひとりで杉の木の下に避難したので杉本という」と「杉本」の語源を紹介している(貫 1959)。当然のことながら、杉本太郎義宗には言及されていない。

鎌倉を扱った近世の地誌では『新編鎌倉志』(以下『志』と称する)・『鎌倉攬勝考』(以下『考』と称する)・『新編相模國風土記』(以下『稿』と称する)、近代の地誌では『皇国地誌』がある。其々の関連の記事を見ると以下のとおりである。

『志』は水戸光圀が編纂させた鎌倉の地誌で、貞享二年(1685)に刊行された。「○杉本観音堂」として項をおこし、杉本観音堂に「スギモトノカンノドウ」とルビをふっている。「大蔵山と號す。坂東巡禮札所の第一なり。(中略)【東鏡】に、文治五年十一月二十三日、夜に入り、大倉の観音堂回祿す。別当浄臺房、煙火を見て悲嘆し、焰の中へ走入りて本尊を出す。纔に焦といへども、身體は敢て恙なしと。」と『吾妻鏡』(以下『鏡』と称する)文治五年(1189)十一月二十三日の火災と奇跡的に本尊十一面観音像が焼失を免れた記

事を載せ、次いで「又建久二年九月十八日、幕下、大倉の観音堂に御参の事あり。」と記している。以下、『鏡』の当該記事を掲示する。

**史料A** 文治五年十一月小廿三日己卯。冴陰。終日風烈。入夜。大倉観音堂回祿。失火云々。別當浄臺房見煙火涕泣。到堂砌悲歎。則爲奉出本尊。走入焰中。彼藥王菩薩者。爲報師徳焼兩臂。此浄臺聖人者。爲扶佛像捨五躰。衆人所思。万死不疑。忽然奉出之。衲衣纔雖焦。身躰敢無恙云々。偏是火不能燒之謂歟。

**史料B** 建久二年九月小十八日甲子。幕下御参大倉観音堂。是大倉行事草創伽藍也。累年風霜侵而薨破軒傾也。殊有御憐愍。爲修理。以准布二百段奉加之給。

『考』は植田孟縉の編により文政十二年（1829）に脱稿された。「楳本観音堂」として項をおこし、「大倉の観音ともいふ。往来の北寄なり。寺領五石六斗を附せらる。堂の額は杉本寺とあり。（中略）山號は大蔵山、坂東第一の札所と唱ふ。開闢は行基なり。（中略）【東鑑】に、文治五年十一月廿三日夜、大倉観音堂回祿、別當浄臺房、烟火をみて悲歎し、ほのをの中へ走り入て本尊を出すといふ。建久二年九月十八日、右大將家、大倉観音堂御参、これ大倉行事草創の伽藍なり。累年風霜相催し、薨破れて軒かたむき、殊に御憐憫有て、修理の爲に準布二百段を奉加し給ふ。同四年九月十八日、將軍家、岩殿と大倉の兩観音堂へ御詣。姫君御不例ゆへ御立願といふ。建曆二年九月十八日、將軍実朝・岩殿・楳本兩観音堂参詣あり」と記している。更に風化した石造地蔵菩薩の絵を掲げ、「杉本観音堂に向かつて右の方にあり 長さ三尺四五寸仏像の最前凹みあり もといかなる形にて為しや 或説に此石佛を 杉本太郎義宗の 身替りの地蔵といふ その伝へを知るものなし 太平記天正本に斯波三郎家永 軍利なくして当杉本観音堂にて 腹切とあり足利尾張守高国の子なり この家長の爲に建てたる石仏たり」と記している。ここに初めて杉本義宗の名が出てくる。

『稿』は徳川幕府が江戸後期に編纂した地誌で、天保十二年(1841)に成立した。「観音堂」として項をおこし、「大蔵観音とも或いは杉本観音とも云へり文禄三年書写縁起曰、文治五年十一月二十三日の夜堂宇回祿にかゝりし時、本尊は大樹の杉の樹に立ち給ふ、故に杉本と云ふ云々、」と記している。さらに『鏡』文治五年十一月二十三日条と建久二年九月十八日条を載せるが、これに続き「堂領を寄付せらる縁起曰、建久二年九月十八日、頼朝再興、時に七尺の前立、并に領地を寄せらる」と源頼朝によって堂宇が再興され七尺の前立と所領が寄付されたことが述べられている。この前立が現在堂の中央に祀られている像(国指定重要文化財)であろう。史料Bにある通り大倉地域の最初の仏教寺院であることが強調されており、そのため源頼朝による復興となったのである。続いて「同き三年五月八日後白河法皇七々日の御佛事を南御堂にて修行せられ百僧の供養あり、當寺僧も其員に加へらる」と記し、『鏡』の記事を略述している。

**史料C** 建久三年(1192)五月小八日己卯。法皇四十九日御佛事。於南御堂被修之。有百僧供。早旦各群集。布施。口別白布三段。袋米一也。主計允行政。前右京進仲業奉行之云々。

僧衆。

鶴岡廿口	勝長壽院十三口	伊豆山十八口
菅根山十八口	大山寺三口	観音寺三口
高麗寺三口	六所宮三口	岩殿寺二口
大倉観音堂一口	窟堂一口	慈光寺十口
浅草寺三口	眞慈悲寺三口	弓削寺二口

國分寺三口也

さらに続けて「四年九月十八日立願の為頼朝参詣あり」として『鏡』の記事を引き、岩殿・大蔵の両観音堂に参詣したことが記されている。

**史料D** 建久四年九月大十八日辛巳。將軍家令詣岩殿大蔵等兩觀音堂給。姫君御不例之時御立願云々。

次いで「建暦二年九月十八日實朝参詣す」として『鏡』の記事を載せている。

**史料E** 建暦二年九月小十八日辛酉。將軍家御參岩殿楢本等觀音堂云々。

また「△地蔵堂」の項を起こし、「石佛長三尺四五寸像の前に凹あり、由來詳ならず或傳に、此石佛を、杉本太郎義宗が、身代の地蔵とも云ふ、按ずるに、延元二年、斯波三郎、此にて自盡せし、斯波家永等が為に、造建せし、石佛なるべし」と記し、杉本太郎義宗の身代の地蔵とされる石仏は斯波家永等の供養塔としている。

『鏡』の記事を見ると、A～Dまで源頼朝の代までは大蔵観音堂で、E 実朝の代になって初めて「楢本観音堂」になる。貫の紹介するように、『観音経』の「念彼觀音力 火坑變成池」の奇跡として観音像が自ら杉の根元にお移りになったといった信仰が芽生えたのであろう。そして『稿』の「○觀音堂」の説明では「大蔵觀音とも或は杉本觀音とも云へり」とあり、「杉本」は観音像の名称としている。「杉本」は地名ではないのである。同項には「△別當杉本寺」、「大蔵山觀音院と號す」とある。この山号「大蔵」こそが地名である。

### 3. 大蔵観音堂の創建と藤沢市宮前「御霊宮」の縁起

藤沢市宮前の御霊宮は村岡郷五ヶ村の総鎮守であった。湯山によると、ここには「御霊宮來由」と題する御霊宮の縁起が数点存在し、仁安三年(1167)・大永元年(1521)・天明三年(1783)に作られた縁起で、前二者は江戸時代に書写されたものであるという。湯山はこの御霊宮の縁起を以下のようにまとめている(湯山2010)。

「この御霊宮は、平良文がその邸内に京都の御霊宮を勧請したものである。祭神も同じ早良親王で、のち鎌倉権五郎景正を祀り、ついで建長年間(1249～56)、北条時頼が葛原親王・高見王・高望王を合祀した。

(中略) 良文の子忠通は同宮の南に新たに館を經營し、(中略) 景通・景成のころ、鎌倉大倉谷に『小行事の坪』を立て、(中略) 後三年の役で源義家が奥州へ下向するとき、(中略) 景正はそのとき、大倉谷にあった屋敷四町四方を義家に進上し、(中略) 景正は鎌倉由井里(由井が浜)に新たに館を建て、ここに玉縄の神明社を移し、そこを甘縄と呼んだ。」

「鎌倉大倉谷に『小行事の坪』を立て」た事が述べられているが、これは史料B「幕下御參大倉觀音堂。是大倉行事草創伽藍也。」に対応するのではないだろうか。「行事」は『現代語訳 吾妻鏡 5 征夷大將軍』(五味文彦・本郷和人 2009年3月)の同条の「註4大倉行事」(註担当は西田友広 241頁)は「不詳。大倉觀音堂の開創者。」としているが、「行事」は「恒例として事を執り行うこと。また、その事柄。儀式や催し物。」(新村編1991)とあり、史料Bは「幕下は大倉觀音堂に参詣された。この大倉觀音堂は大倉に於ける仏教行事を恒例に行う最初の寺院である。」という意味であろう。『御霊宮來由』に於ける「鎌倉大倉谷に『小行事の坪』を立て」というのも史料Bを参考にすると「鎌倉大倉谷に小さな仏事を恒例に行う場所を定めた、すなわち寺院を建てた」というように解釈できる<sup>(4)</sup>。大倉地域を滑川が東西方向に流れる鶴岡八幡宮の東側区域

と考えると、そこに鎌倉時代以前から存在する寺院は大倉観音堂（現杉本寺）しかない。『御霊宮來由』のこの記事は、大倉観音堂の創建が鎌倉党によってなされたことを伝えているのである。杉本観音の本尊は平安後期の像と考えられている。この像が杉本観音と呼ばれる像である。頼義の陸奥守任官は永承六年（1051）であり、像の造立年代より古い。実際は景正・影継（影経）の時代であろう。一方、考古学の資料の上では大蔵地区での平安後期段階の出土品はなく、最も新しいものは押木が指摘している二階堂字荏柄 38 番 2 地点の発掘調査で出土した 10 世紀後半 H72 段階の旗指窠と思しき灰釉陶器深碗である（押木 2025）。『御霊宮來由』の伝承は必ずしも考古学的に証明されているわけではないが、大倉観音堂の由来を語る唯一の史料である。

湯山はまた内閣文庫蔵『源平闘諍録』が「宝治合戦（宝治元年・1247）以前に成立したとされている古本」であり、「その『桓武天皇より平家の一胤の事』と題する冒頭の一節に、桓武平氏の系譜が述べられ、高望王の末子、一二人目の良文は村岡五郎といい、『良文は鎌倉の村岡に居住す』とある。そして良文の四男忠通は村岡平太夫といい、『村岡を屋敷となし、鎌倉・大庭・田村等を領知す。鎌倉の先祖これ也』と書かれている。」と述べている。鎌倉時代には鎌倉の開発・在地領主が鎌倉党であったとの認識は成立していたといえよう。

#### 4. 鎌倉時代における観音巡礼の成立と杉本観音

観音巡礼の原型は西国三十三ヶ所巡礼とされ、その成立は平安末期 12 世紀頃とされている。三井寺僧侶の伝記を集めた『寺門高僧記』によれば応保元年（1161）に近江三井寺の覚忠大僧正が近畿地方の三十三ヶ所の観音霊場を七十五日かけて巡礼したのが実質的な始まりではないかと考えられている（清水谷 1987）。

源頼朝は熱心な観音の信者で、三代将軍源実朝も父と同様であり、二人共大倉観音堂・岩殿観音堂に参詣したことが『鏡』に見えている。特に頼朝は文治五年の大倉観音堂の焼亡後の復興に際して、建久二年（1191）九月十八日には修理の為に準布二百段を奉加している。この復興事業に際し「観音像自らが火炎の中から杉の根元にお移りになった」という奇跡譚が創出・拡散され、これに伴い多くの御家人等から喜捨が行われたのであろう<sup>(5)</sup>。

坂東三十三観音霊場の成立に当たっては平氏追討戦に当たって東国武士達が戦乱の中で西国三十三観音霊場にふれた事や戦闘における観音の加護を願った事が考えられており、こうした東国の武士達の信仰の上に源氏一家の観音信仰は大きな力があつたのではないかと考えられている（清水谷 1987）。

現在鎌倉市指定文化財に指定されている十一面観音像は総高 195 cm を測り、伝行基菩薩作とされる最も素朴な像で、「杉本三軀の十一面観音像の中では制作時期が最も早い」（清水 1986）とされている。この像が焼亡を免れた像であろう。現在杉本寺観音堂には三体の十一面観音像が安置されているが、中央に安置されている総高 211.3 cm の寄木造像（伝慈覚大師作 国指定重要文化財）は「おだやかな彫口による藤原時代の様式をそなえるなど古様な部分が見られるが、顔は鎌倉時代らしい引締った頬をもち、それ以前にあった像を模した作である事が想像される」と指摘されている。復興にあたって模刻されたものであろうか。火災当時二軀の観音像が存在したことが想起される。大倉観音堂焼失に当たって住侶浄臺房が無傷で本尊を救出した事は、この古像が観音力を著したとして大きな驚きをもって受け取られた事であろう。ここに自ら杉の根元に移られたという奇跡譚が創作され、広く喜捨を求めるため喧伝されたのであろう。

こうした宗教的環境を背景にして坂東三十三観音巡礼が創始されたと考えられ、天福二年（1234）には坂東札所が成立していたことは確実とされ、その起源はそれ以前に遡るとされている。杉の根元に観音像自ら

がお移りになったという伝説は、あるいは建久三年の後白河法皇四十九日法要に集まった僧侶間で生み出されたものであったかもしれない。

『鏡』の他の記事が「大蔵観音堂」とあるのは異なり、史料E『鏡』建暦二年(1212)九月十八日条、実朝の参詣に「椀本観音堂」とあるのはこの奇跡譚がそれ以前に遡ることを意味し、非常に早く広まったことが窺われる。まさに「杉本」の名が文治五年の火災における観音像の救出劇を契機としていることを物語っていよう。大倉観音堂の本尊十一面観音像は「杉本観音」という異名で知られるようになったのであり、鎌倉の「杉本」は大倉観音堂本尊像の異名なのである。なお、『鏡』ではこの記事以外は「大倉(蔵)観音堂」である。

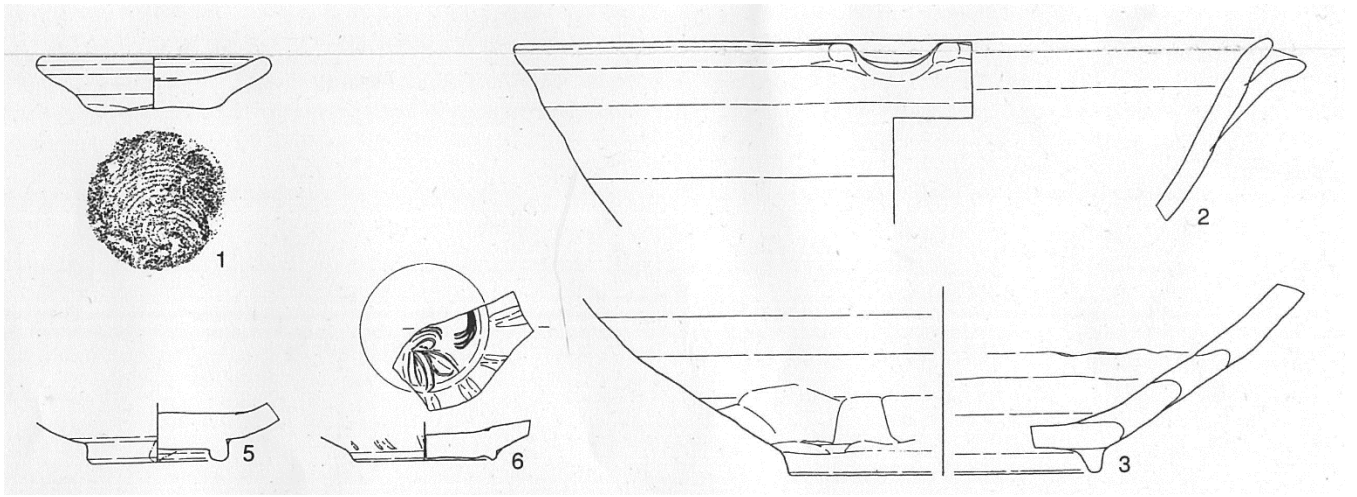
## 5. 杉本寺南方の発掘調査とその成果

鎌倉市二階堂字杉本 912 番 1 ほかにおける発掘調査である。鎌倉市立フレンドリー鎌倉建設に伴う発掘調査で、鎌倉市が杉本寺周辺遺跡発掘調査団(団長 吉田正一郎 青山学院大学名誉教授)に委託して実施した。調査は二次にわたって実施され、第一次調査が1990年5月11日～1991年3月31日で、調査面積900㎡である。第二次発掘調査は1999年7月28日～1999年12月4日までで、調査面積は590㎡、合計1490㎡である。報告者である馬淵によればここでは4面9期の遺構面が確認され、12世紀第3四半期から14世紀の年代が与えられている(杉本寺周辺遺跡発掘調査団2002)。

ここでは最下層の1期でも最古の遺構堀1の出土品を確認することで、今回の検討テーマ、杉本義宗に関する遺跡かどうか検討したい。馬淵は報告書「第四章まとめと考察 第2節 中世遺構・遺物の変遷とその年代 2. 変遷とその年代 第1期遺構群」の中で「年代:堀1の年代は、出土遺物から見れば、12世紀第3四半期～同第4四半期を示している。」としている。

以下、堀1の遺物について検討してみたい。図1Aは報告書の内、堀1出土の陶磁器である。図の縮尺中4は他の1/2である。1はかわらけの小皿、2・3は捏ね鉢、4は常滑甕、5は青磁碗、6は青白磁皿と報告されている。報告書では1のかわらけは鎌倉国宝館の発掘調査で確認された最下層の土器に類似しているとして特に古い年代が与えられている。5は連弁文碗とされているが、見込みと外側面の位置、高台の形状からは劃花文碗であろう。最も同系碗に無鎬連弁が施されている例もあるが、実測図にも連弁の表記はなく、実見の結果でも連弁は存在しない。この青磁碗は平泉でもよく見られる製品であるが、13世紀前半までは普遍的に出土する製品である。

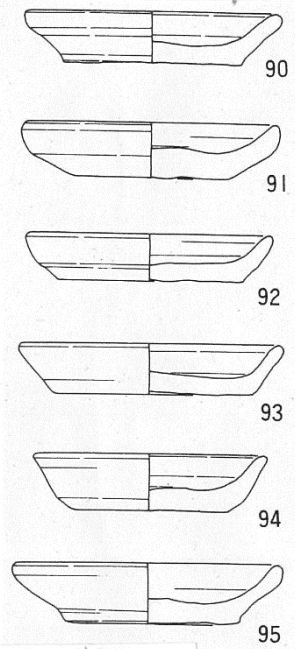
これらの出土品のうちかわらけを比較してみたい。図1A1はろくろ成形のかわらけである。糸切りした底面から直接外反する小皿で、口唇部は無調整のまま丸くなっている。底部側面が丸くなっているのが気になるところではあるが調整なのか、崩れたのか半然としない。砂質で焼成はあまり良くなく、やや厚ぼったい。これに類似するかわらけは馬淵が近隣で『向荏柄遺跡』(向荏柄遺跡発掘調査団1985)を報告しているので、それと対比してみたい。図1Bで示したかわらけは同遺跡I期出土遺物の糸切のかわらけである。第II面の出土遺物で「面直上層又は溝状遺構出土のものがこれに当たる」という。A1に比べて91を除き大略薄手で外反させるために粘土を挟んだ指を締めて口唇部を薄く仕上げている。底部から口唇部にかけての変化を示す隆起又は凹部が見られるが、90・93・94では口唇部を明らかに外反させている。Cは国指定史跡鶴岡八幡宮境内の内、鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う発掘調査(鶴岡八幡宮境内発掘調査団1985)の最下層、北枕西向き



A 杉本寺周辺遺跡

0 20cm

B 向荏柄遺跡



0 10cm

C 鶴岡八幡宮境内 (鎌倉国宝館)

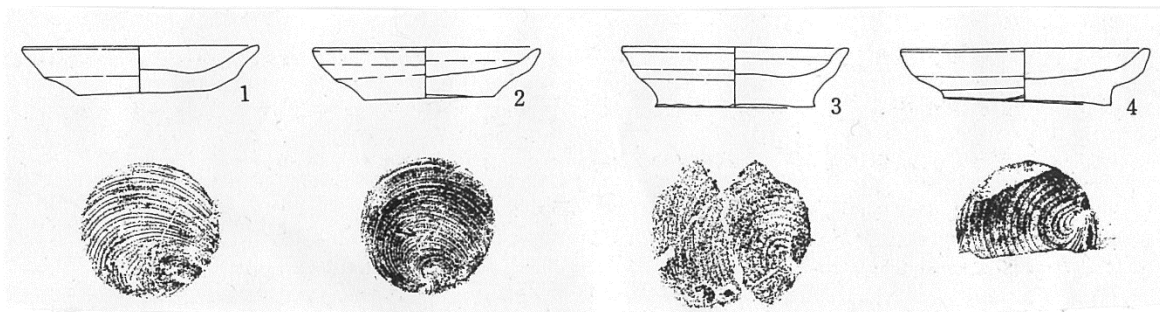


图1 杉本寺周辺遺跡堀1出土品と比較資料

で埋葬された壮年男女の合葬墓に建てられたと考えられる五輪塔板婆を伴う水田の埋め土から出土したかわらけである。底面糸切の脇から外反し、さらにもう一度外反させ、口唇部は薄くなるように三角形に鋭く整形されている。報告書での年代を比較してみると C の年代は平安時代末鶴岡八幡宮創建（治承五年）以前とし<sup>(6)</sup>、A1 の年代は 12 世紀第 3 四半期、B の年代は 13 世紀初頭を中心とした年代としている（向荏柄遺跡発掘調査団 1985）。A1 のかわらけは B のかわらけよりも整形技法に省略が進み、厚手で形態が簡素化している様に見える。整形技法の変化からは C→B→A と変化してきたように受け取れる。馬淵は A1 の年代は「12 世紀第 3 四半期～同第 4 四半期」としているが、「12 世紀第 3 四半期」の年代を与えるのであれば、少なくとも C に示されたような「かわらけ」でなければならない。A1 に 12 世紀第 3 四半期の年代を与えることはできない。

一方、A4 は報告書では常滑窯第 4 期の製品に比定され、その生産年代は 1190～1220 年とされている。実見したところこの甕は胎土がきめ細かく、石英を含まない。器壁表面に叩き目があるが消されており、その上に丸棒のような工具で沈線文を描いている。表面は黒褐色を呈する。これは常滑窯の製品ではなく、恵那中津川窯の製品と考えられる。恵那中津川窯は 13 世紀になって常滑窯の影響下に開窯されたとされている（中野 2022）。堀 1 の埋没年代は A4 の焼成開始年代から 13 世紀以降であり、これを埋めた後の遺構上面から 5 期の常滑が出土していることから、堀 1 の埋没年代は 13 世紀第 1 四半期から第 2 四半期の早い頃と推定される。馬淵によるこうした年代観の創出は、馬淵・岡が導き出そうとした杉本義宗・和田義盛の本拠地に結びつけるための年代操作と考えられても致し方あるまい。

## 6. 鎌倉における字「杉本」の成立

それでは地名としての「杉本」はいつ発生したのであろうか。『稿』の「二階堂村」の小名には「四ツ石小路・東御門・西ヶ谷・龜ヶ淵・向荏柄・稲葉越・熊野谷・杉本小路」<sup>(7)</sup>が挙げられ、明治になって編纂された『皇』には「相模国鎌倉郡二階堂村」について「徳川氏政治ノ初ニ至リテ旧小名荏柄杉本紅葉ガ谷薬師堂ガ谷亀ガ淵獅子舞稲葉越等ヲ合セテ一村トナシニ階堂ヲ以テ村名トシ」と記している。『稿』の「四ツ石小路」は『皇』には挙げられていないが、現在の字は「四ツ石」である。「杉本小路」は『皇』では「杉本」になっている。また「熊野谷」は熊野社が荏柄天神社に合祀された（貫 1959）ためか、かつて熊野社があった谷戸の字は「紅葉ヶ谷」となり、新しい字に代わっている。すなわち近代になって小名が整理された事がわかる。これは明治二十二年（1889）四月一日、町村制施行により二階堂村を含め合併し東鎌倉村になった際に小名の再編が行われた為と考えられる。旧村を大字とし、小名を字としたが、「四ツ石小路」・「杉本小路」は「小路」を取って小名が縮小され、字となった。『皇』の記事は明治になって成立した新しい字によって徳川時代の記事が書かれているのである。以上みてきたとおり、鎌倉の地名としての「杉本」は明治二十二年（1889）の町村合併によって成立した新しい字であることがわかる。

この間、古文書には「杉本」が確認されるが、これは地名ではなく、「杉本寺」のことであろう<sup>(8)</sup>。『稿』には観音堂の別当が「杉本寺」とある。

この地と杉本氏との関連を示すものは僅かに室町時代の石佛についての『考』・『稿』の記載する杉本義宗の身替地蔵という伝承だけである。この伝承については両書とも「その伝へを知る者なし」とし、斯波家永等の供養塔であろうとして否定している。この伝承を基に北村は『三浦義明及三浦黨』を書いたのであり、こ

の本は児童・生徒に三浦一族が偉大な氏族であった事を顕彰する事を目的とした小説である。この時期としては良く地域史を調べているが、元々学問的な考え方に立った書ではない。

## 7. 千葉県館山市西長田所在の杉本山観音院

それでは「杉本」の比定地は何処であろうか。そのヒントは北村がすでに「安房国豊房村杉本」として示しているが、この可能性は検討されていない。

千葉県館山市西長田 372 番に所在する杉本山観音院東福寺は行基菩薩が聖観音像を刻み、天平六年 (734)、慈覚大師が創建したと伝える (ミュージアムサポーター「絵図土」作成『観音院の文化財解説』館山市立博物館監修パンフレット)。本尊聖観音菩薩は像高 75.5 cm、顔は丸くあどけない表情をつくっている。平安時代後期、前立は平安末期～鎌倉初期とされており (館山市博物館 1987・1988 再版)、南北朝～室町時代とされる鰐口がある (館山市博物館保管)。境内には室町時代の宝篋印塔の蓋や中世の五輪塔が存在する。「杉本」という山号の由来は鎌倉の杉本寺にあるとされており (たてやまフィールドミュージアム『観音院―館山の寺社と名所』2020)、現在館山市内に「杉本」という地名は存在しない (館山市役所税務課資産係編 1971)。

当寺所蔵文書には慶長十一年 (1606) 七月三日付杉本別口宛山下郡西長田村内二石の里見梅鶴丸忠義による寄進状が残されており、これが最古の文書である (佐藤・滝川 2008)。伝承は別にして、江戸時代初期には「杉本」を山号としていたことがわかる。「もと寺院は多く山にあり、その山の名をもって呼ばれた」(新村 1991) から、山号は地名であることが多い。鎌倉の杉本寺が『鏡』では「大倉観音堂」と呼ばれ、現在は大蔵山杉本寺観音院と号するときで、杉本山観音院東福寺は「杉本」という地に建立された観音菩薩を本尊とする寺院であると考えられる。本尊聖観音菩薩像と前立共、平忠常の乱後の造立である。寺院の名称が変化していないとするならば、大倉観音堂の本尊が「杉本観音」と呼ばれるようになる 13 世紀初頭以前から、現千葉県館山市西長田地区には「杉本」という地名が存在したことになろう。すなわち、杉本山観音院東福寺の地付近は古くは「杉本」と呼ばれる地であり、杉本義宗の名字の地であった可能性が存在するのである。

## 8. 館山市長田地区と杉本義宗の名字の地としての可能性

杉本山観音院東福寺は館山市の東南部、県道 86 号館山白浜線沿いの汐入川南部支流の丘陵先端に位置している。(図 2) ここから県道を谷沿いに進み山を越えれば神余地区で、南下すると安房国札三十四番霊場松野尾寺を経て南房総市白浜に至る。南西に谷沿いに進めば館山市神余地区の中心地で、二十九番金蓮寺を経て安房国一宮安房神社・平砂浦海岸に至る。観音院から北上すれば館山市湊を経て北条・府中に至

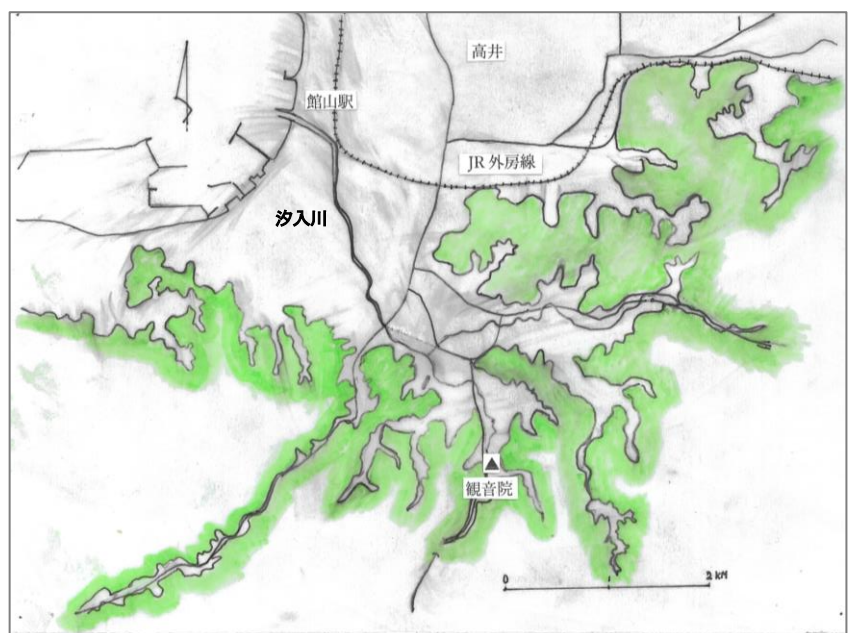


図 2. 観音院の位置

る。すなわち杉本山観音院は房総半島の最南端から館山湾岸を経て安房国国府に至る幹線道路上に位置しているのである。観音院は東長田と西長田の境に位置し、この地域を含めた旧安房郡豊房村（現館山市）には「和田」の字が残されている（館山市役所税務課資産係編 1971）。館山湾に注ぐ汐入川を遡上し、県道 188 号線を東行して峠を越えて瀬戸川上流に出ると南房総市千倉町に至る。旧安房国朝夷郡である。瀬戸川河口部の北側には千倉白子漁港がある。千倉町の北側には和田町和田港があり、和田氏の伝承が残る。このルートは外房と内房を結ぶ最短ルートである。

「長田」は貞和四年（1365）、「安房国長田保西方」として表れ、足利基氏が円覚寺仏日庵に寄進している（「一六八 応安三年二月二七日付 円覚寺文書目録」・「一九一 関東管領上杉朝房奉書」・「一九二 安房国守護結城直光遵行状」鎌倉市史編纂委員会編 1956）。寄進の経過を考えれば北条氏得宗領であったものが鎌倉幕府滅亡により収公され、北条得宗家の墓所である仏日庵を管理する円覚寺に施入されたのであろう。あるいは和田氏→三浦氏→北条得宗家といった伝領の流れを考えてもよいのかもしれない。

現在の西長田はこの「長田保西方」の流れをくむものであろう。平忠常の乱により荒廃・廃絶した旧公領を再開発して成立したのが長田保で、その一部に「杉本」があり、杉本山観音院の山号として残ったのではないだろうか。

平忠常の乱後の安房国の復興の契機になったのは前九年合戦後、源頼義に恩賞として与えられた朝夷郡丸郷であったのであろう。南房総市丸本郷から国衙域まで直線で約 6 km である。丸郷を中心として源氏の財力を背景に再開発が行われ、それは周囲を巻き込み、家人を各地に配して<sup>(9)</sup>、国司からの国判を受けてその土地にも財力を投入し、中世的在地領主に発展させていったのではないだろうか。後三年合戦後、源氏の伸長を嫌った白河上皇はこの戦争を私戦と断じて恩賞を与えなかったが、従軍した家人たちに報いた方法が、荒



図3. 館山とその周辺

廃した耕地の再開発への配置であり、財政的・人的援助や再開発にあたっての水利権・通行権・境界の調整・国衙への開発申請（国判の取得）等であったのではないだろうか。

源義朝の東国への下向の時期は不明であるが、上総国の上総常晴又は常澄の養君となつて後の熊野山領畔蒜荘（千葉県君津市・袖ヶ浦市・木更津市付近）または摂関家領菅生庄（千葉県木更津市）で育てられたとされている（伊藤 2015）。紐帯が緩んだ東国の家人層との関係強化のため為義が行った家人対策・東国の所



図 4. 杉本山観音院本堂

領支配強化の一策であろうが、ここから河内源氏伝領の所領である安房国朝夷郡丸郷は一日程度の距離である。当初の下向地は此方の可能性も指摘されている（伊藤 2015）。上京後も東国への下向は定期的に行われたと考えられ、そのために拠点となる鎌倉・沼間に館が築かれたのであろう。保元の乱には義朝に丸・神余・安西等の安房国の武士が従軍しており、安房国の支配は十分に行われていたと考えられる。

### 9. 朝夷郡千倉地区の外房航路上の位置と重要性

杉本太郎義宗は、延慶本『平家物語』によれば長寛元年（1163）に安房長狭郡に侵攻し、上陸に際して受けた傷がもとで翌年死去している。杉本義宗は長狭常伴と浦賀水道海域における支配権をめぐる対立関係にあったとの意見があるが（野口 2017）、杉本氏の拠点を館山市長田地区とすれば、後に和田氏が朝夷郡に拠点を持っていることを踏まえれば、この合戦は外房側で行われ、房総半島から大島を経由した伊豆半島への外洋航路の安房側の支配権をめぐる抗争であったのではないかと推測される。これは『鏡』治承四年（1180）九月十一日条によれば、源義朝が頼朝の昇進を祈念して平治元年（1159）六月一日に源頼義が前九年の役での恩賞として朝廷から与えられた安房国丸郷を伊勢神宮に寄進していることに由来していると考えたい。これにより、それまでの年貢の輸送ルートが丸郷→安房国国衙→内房→三浦→相模国衙（国府津）→京という国衙を経由したルートから、丸御厨→外房（南房総市和田町和田港付近か）→千倉町（朝夷郡）→大島→下田（蒲屋御厨）といった外洋航路に変更されたと考えられる。この時期に安房国に三浦氏が進出したのは、航海に秀で勢力の大きかった三浦氏に丸御厨の年貢輸送が委託されたからで、房総半島内では千倉～館山ルートは外房と内房を結ぶ最短ルートである。館山湾から浦賀水道を横断し、三浦半島を経由して直接あるいは相模湾沿いに下田に至ることもできる。丸御厨から伊勢・京に年貢を輸送するのであれば、欠くことのできないルートとなる。

千倉は相模灘から南房総の岩礁地帯、野島崎を超えた最初の外房の砂浜海岸地帯であるが、岩礁が多く、港に適した場所は限られている。冬の野島崎沖では船の遭難が多発しており、手前で風待ち・潮待ちの湊が必要になる。これが現在の南房総市千倉町北・南朝夷地区である。またここから瀬戸川の川沿いに遡上し、千倉町大貫から山越えて安房郡の古茂口（館山市古茂口）で汐入川上流に出、川沿いに下って南条・大戸・北条を経て館山湾（館山市湊）に至り、浦賀水道を横断して三浦半島に出る事もできる。外房と内房を結ぶ最短ルートである。潮・風の状態によっては浦賀水道を三浦半島に回るのが安全なルートであり、双方を抑えるのが得策であろう。杉本氏は三浦半島との連携を考慮して内房側に拠点を築きながら、外房の瀬戸川河口部の支配を目指したのではないだろうか。平治の乱後、調停者を欠いたこの外洋ルート開拓は外房の外洋航路の拠点を支配していたであろう長狭氏との競合・抗争は避けることができず、合戦となったのであろう。結果、杉本義宗の戦死は三浦氏による房総半島先端部の外洋航路支配の頓挫を招いたのではないだろうか。この時、嫡子和田義盛は18歳で元服していたであろうから、杉本義宗が朝夷郡まで進出していたと仮定すれば、安房郡・朝夷郡和田は義盛の当初の名字の地でよいのかもしれない。またこうした仮説が是とされるのであれば、三浦氏が安房国の案内者とする『鏡』治承四年九月三日条も首肯されるのである。

## 10. 平安時代末の内海・外洋航路支配と源義朝・院権力

京都府福知山市桐村家伝来の『大中臣氏略系図』は常陸国御家人那珂氏の系図である。「上総介頼継の孫総中五実経の傍注に「此時龜劫文を給わり畢。保元二年相州六浦荘を賜わると云々」と記されていた(網野 1982)。上総国衙に何らかの役職を持っていた藤原氏の一族の大中臣実経が保元の乱の戦功によって、「一一五七年、源義朝から六連を拝領したことは史実である可能性が高い」とされている(金沢区制五十周年記念事業実行委員会 2001)。

この相模国六浦荘を義朝が上総国との関係が想定される大中臣氏に与えていることは、上総と三浦半島基部を結ぶ海上交通を確保していた事を示し、国衙系の在地領主<sup>(10)</sup>とは別に配下の武士を現地の領主として配したことは、上総～三浦半島間を直接支配下に置いたことを示している。上総御曹司と呼ばれ木更津付近で養育されたとされる(伊藤 2015) 義朝は海上交通の掌握の重要性を肌感覚で認識していたと思われる。義朝は天養元年(1144) 大庭御厨、保延二年(1136)以降久安元年(1145)までの間に相馬御厨の現地支配に介入し、両者とも在地領主を家人化することに成功している。相馬御厨は茨城県と千葉県の間が存在した内海の南部に広がる広大な地で、内海から東京湾に出る水上交通の要所である。義朝は木更津辺を拠点に陸奥国から那珂川経由で内海、東京湾の木更津・六浦・安房湊・三浦半島を経て大庭御厨・伊豆半島下田(蒲御厨)といった水上交通網を支配しようとしたのではないだろうか。これは平時の乱後、後白河上皇が永暦年中(1160～61) 安房郡房荘を京都に勧請した新熊野社に施入した事とも関連し、『鏡』文治二年(1186)三月二十日条に下総國匝瑳南条荘、同六月十一日条に熊野別当知行上総国畔蒜荘があるのも水上交通網との関係でとらえられるものであろう(袖ヶ浦市郷土博物館編 2007)。

大中臣実経の子経久は頼朝の有力な御家人として活躍し、那珂氏を称するようになったが、1207年頃には那珂東郡・同西郡の総地頭職、京都守護職等を失っているから、この頃までに六浦荘の諸職を失ったと考えられ、その後六浦荘の諸職を与えられたのが和田氏であったのであろう。

大中臣実経に相州六浦荘を与えたのは、東京湾に注ぐ水系で運ばれる所領の年貢の輸送を六浦を経由し、効率的に京へ運ぶ為のものであったのであろう。丸郷の年貢もこのルートに乗せられたのであろう。こうした場合、鎌倉・沼間の館が東国の源氏所領支配の重要な拠点となつてこよう。従来沼間館の意味は考えられてこなかったが、この年貢を陸路で相模湾側に出すとすれば、六浦とは山越えて近距離にある沼間館の方が利便性が高いのかもしれない。

義朝による東京湾岸の湊の掌握を考えると、上総介広常の弟金田頼次が三浦義明の娘を娶り三浦市金田に居たとされる三浦氏と上総氏の血縁の成立は、為義・義朝の意向によって成立したのかもしれない。家人相互の結束の強化と東京湾内・外房から相模湾・伊豆半島にかけての海上交通路の掌握といった視点があつたと考えられよう。相模西部の中村氏と三浦義明の子岡崎氏の婿入りも同様で、三浦と国府津との関係を考えてみるべきである。

こうした義朝を通じての源氏家人・所領支配の再編・構築の中に杉本義宗を位置づけてみる事は可能であろう。少なくとも安房国丸郷を伊勢神宮に施入した後には年貢の輸送ルートは変わったと考えられる。関東からの御厨の年貢は海上輸送が行われる場合、伊豆国下田の蒲屋御厨に集積され、そこから鳥羽へと海上輸送されると考えられる。そうした場合、房総半島先端から大島経由で下田に向かうのが年貢輸送の最短ルートになるのである。この新たなルート開発は奥州からの源氏所領からの年貢の京への輸送の最短ルートとな

るのである。このルートの掌握は院・摂関家とも競合するのであり、そうした手先として義朝が動いていた可能性も考えられる。安房国杉本への三浦氏の進出はいくつかの時期が考えられるが、一つは天養二年、相馬御厨・大庭御厨侵入事件後、もう一つは三浦氏に対する保元の乱の戦功に対する恩賞である。いずれにしても安房国が鳥羽上皇・後白河天皇側近の知行国となっていたことから、(伊藤 2015) 与えられた土地の開発に対する国判は容易に得ることができたのであろう。義朝はこの二御厨の侵入事件を通して水上交通路に関する理解を深め、内海・外洋航路支配に介入していったのではないだろうか。

## まとめ

鎌倉の「杉本」の名称は「大蔵観音堂」の十一面観音像の異称であり、地名となったのは近代であった。現在の「杉本」の地は鎌倉時代には「大倉(蔵)」であったことは『鏡』に見えており、異論のさしはさむ余地はない。鎌倉時代の文治五年(1189)以降に生じた「杉本」の名称が長寛三年(1163)に死亡した杉本義宗の名字と関係することはあり得ない。この事は杉本氏の名字の地の比定が間違っていることを示しているのである。

杉本義宗の名字の地を千葉県館山市西長田の杉本山観音院付近と考えた。この地は内房と外房を結ぶ最短ルート上、又安房国の南北を貫く幹線道路上にある。付近には「和田」・「高井」の字がある。

源義朝は康治二年(1143)までに相馬御厨介入事件を、天養二年(1145)には大庭御厨侵入事件を起こし、保元二年に大中臣氏に相模国六浦を与えるなど東国の水上交通網支配の構築に積極的に介入しているから、杉本義宗の安房進出はこの頃か、あるいは保元の乱後、河内源氏の家督を掌握した後であろう。杉本義宗の安房への進出は義朝・後白河院の南関東における水上交通網の支配構想上に位置づけられ、直接的には朝夷郡丸郷(丸御厨)からの年貢輸送の安全と利便の為であったのではないだろうか。

## 註

- (1) 『源平盛衰記』の成立は南北朝期とされており、『太平記』と同時代である。『太平記』には北条氏の草創神話が語られているが、『源平盛衰記』の「小坪合戦」は同様に義茂流和田氏の草創神話であろう。延慶本『平家物語』は由比ヶ浜・小坪で合戦があった事は伝えるが、その詳細は伝えていない。『源平盛衰記』では畠山勢は金江河端で声をかけられ、稲村ヶ崎経由で延々追撃して小坪で追いついている。藤沢市石上はその経路に当たると考えられているが、そこから小坪までは約20 kmである。三浦方の馬は弱り主も疲れていると書かれている。当時の日本馬は長時間の全力疾走はできないから、追撃されればそれ以前に追いつかれているはずである。物語上、どうしても鎌倉で合戦をする必要があったのであろう。義茂は鎌倉の東端名越から西端の稲瀬川まで突撃したり、和田義盛・義茂兄弟は弓の名手として『鏡』に登場するが、この合戦では兄和田義盛はそれまで実戦での馳弓の経験がないと告白し、実光に馳弓の教えを受けている。一方義茂は、平安時代末の騎馬武者の戦法(騎射)ではなく畠山方の武者を切落しており、南北朝期の合戦の仕方になっている。また綴太郎と義茂の組打ちは和田合戦における義茂の娘婿高井重茂と朝比奈三郎義秀との組打ちを彷彿とさせる。和田合戦では義茂の娘婿重茂は朝比奈義秀に組みふせられて討死しているが、ここでは義茂が綴太郎を打ち負かしている。この合戦は源頼朝が関東へ進出して最初の、しかも後の鎌倉政権の所在地である鎌倉での勝利である。義茂流和田氏は足利尊氏に仕えたが、北朝方にあつて義茂流和田氏が頼朝の関東進出に当たって最初の勝利を「鎌倉」で上げたとする、自己の存在を強調するため著された祖先の英雄譚・顕示であろう。由比ヶ浜・小坪合戦は存在しても具体的内容は伝わっていないから、「小坪合戦」は必ずしも歴史的事実とは限らず、南北朝期の創作ではないだろうか。史料としての扱いに注意が必要であろう。

- (2) 三浦系図には「義宗 杉本太郎 長寛元年於安房国合戦中矢、着岸時卒、年三十九」とあり、上陸に際して戦死したように受け取れる(石渡1980)。
- (3) この本について赤星直忠は『三浦半島城郭史(上) 横須賀市史No. 8』の註9で「(前略)北村氏は児童生徒の教育上三浦氏及び其一党の忠節を説くを目的に一種の小説的物語としてこの書を著したことは其の序文にある通りであるが之の本があまりに現実の場所について明瞭にかかる事があつた、かかる名があつた、こんな話があると如何にもまことの如く書かれたため、当時三浦大介並びに其一党の研究者として第一人者と考えられた人の著作だけに之が全部真実のものとして其の土地に語られる様になり、現実に其の土地に伝わっていたものと、新たに北村氏の創作によつたものが一緒くたになつて改めて土地の人に記憶されるに至つたことは、今日三浦一族のことを実地に調査するに当たつて昔からの伝えをそのままの形で求め出すのに極めて不便なものとなつてを知つた。北村氏がこの著をされるに際し実地について長年月調査した史料や文献資料は相当あつたらしいのに之を整理して「三浦氏に関する資料」として残されることがなかつたらしい。(中略)根本資料の残されなかつたことをまことに惜しく思う。」と述べ、註12では「北村包直氏著『三浦大介と三浦党』は氏の生涯をかけた三浦氏研究の結晶であつた。惜しい事に著されたものは生徒児童教育に資するためにと小説化せられた表現がとられたため、創作部分と史実部分の区別がつかなくなった。従つて之がどこまで史実であるかが不明のため、史料的価値に乏しいが、此の書によつて研究の緒を得る部分も多い。」と記している。肝に銘じるべきである。馬淵・岡は杉本寺周辺遺跡(二階堂字杉本912番地点)を杉本義宗・和田義盛館と推定しているが、発掘調査の成果からは12世紀中頃まで遡る資料は出土しておらず、堀1の埋没年代は13世紀1四半期から第2四半期の早い時期と推定される。和田義盛滅亡後であろう。また和田義盛の館は『吾妻鏡』建仁元年(1201)三月十日条によれば若宮大路西類であつたが、当該地に杉本義宗・和田義盛館の伝承や記録は存在しない。
- (4) 『鏡』のこの記事は用語の用い方が共通しており、各々別の用例とも考え難い。宮前の御霊宮に北条時頼が建長年間に葛原親王他を合祀したことが「御霊宮來由」にある事から、この事は北条氏周辺に知られており、『鏡』の編纂に際し記事にとられたのかもしれない
- (5) 杉本寺南側の発掘調査では永福寺同范瓦等鎌倉時代初期の瓦が出土している。これらの瓦はあるいはこの時の復興に際して採用されたものかもしれない。頼朝自身が修理の為に准布二百反を奉下しているから、永福寺同范瓦が使用された可能性は捨てきれないであろう。
- (6) 筆者は鶴岡八幡宮創建期にはまだこの区域は境内外であつたと考え、五輪塔思想の受容の経過を考えて1180年以降と考えた。さらにこの区域が埋め立てられる契機となつた源平池の造成と上下両宮の創建を契機とした水田の埋め立てを伴う境内地及び周辺の整備を考慮し、かわらけの年代を1180~90年の間とした(玉林2025)。
- (7) 『考』では「相本観音堂」について「往来の北なり」としている。この往来が杉本小路なのであろう。
- (8) 例えば天正十五年の年号のある「建長寺御寄進坪帳」案には「大統替 九二坪 二皆堂杉本下 貳百七十六文(以下略)」とあるが、これは杉本寺の下という意味であろう。これを杉本という地名の下(しも)という考えもあろうが、尾根中腹に杉本寺があることから、その下と考えることが妥当であろう。『神奈川県史 資料編3 古代・中世(3下)』「九三二八 建長寺寺領坪帳案」1979年 神奈川県県民部県史編纂室編 神奈川県 これを馬淵は「二階堂杉本」と紹介している(杉本寺遺跡発掘調査団2002)。史料操作と取られても致し方ない行為である。
- (9) 近世の系図「平群系図抜粋」には「房州 安西・安藤・神余等」の祖先を平良文第二子忠通(貞道)とする。これは三浦氏同様に家人を安房国に配した事例かもしれない。保元の乱では義朝の配下の武士に安西・丸・神余氏がいる。
- (10) 六浦常福寺(廃寺)は国衙系官人を同族に持つ内蔵武道等によって久安三年(1147)に建立された(金沢区制五十周年記念事業実行委員会編2001)。

#### 参考文献

- 赤星直忠 1955年 「第三章 平安時代 第二章 各論 杉本館」『三浦半島城郭史(上) 横須賀市史No. 8』
- 赤星直忠 1959年 「第四章 鎌倉時代 第一節 總説 杉本城」『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館
- 網野善彦 1982年 「桐村家蔵『大中臣氏略系図』について」 茨城県史研究 第48号

- 石井 進 1986年 「中世六浦の歴史」『三浦古文化研究』三浦古文化研究会
- 石井 進 2022年 「海から見た安房」『旧国中世重要論文集成 安房国上総国』滝川恒昭編 戎光祥社出版株式会社
- 石渡隆之 1980年 「三浦系図」『三浦大介義明とその一族』所収
- 伊藤一美 2015年 『大庭御厨に生きる人々』藤沢市史ブックレット6
- 押木弘己 2025年 「『所素辺鄙』小考—遺跡調査の「体感」から探る頼朝入部時の鎌倉—」『鎌倉市教育委員会教育文化財部調査研究紀要 第7号』鎌倉市教育委員会
- 岡陽一郎 1995年 「中世居館再考—その性格をめぐって—」『中世の空間を読む』五味文彦編 吉川弘文館
- 岡陽一郎 1999年 「泰時以前の鎌倉」『鎌倉 第88号』鎌倉文化研究会
- 岡陽一郎 2019年 『大道 鎌倉時代の幹線道路』吉川弘文館
- 金沢区制五十周年記念事業実行委員会編 2001年 『図説 かなざわの歴史』神奈川新聞出版局
- 鎌倉市史編纂委員会編 1956年 円覚寺文書『鎌倉市史 史料編第二』吉川弘文館
- 菊池 武 1980年 「鎌倉幕府と三浦一族」『三浦大介義明とその一族』三浦大介義明公八百年祭実行委員会
- 北村包直 1925年 1982年復刻 『三浦大介及鎌倉黨』横須賀郷土資料復刻刊行会
- 五味文彦・本郷和人編 2009年 『現代語訳 吾妻鏡 5 征夷大將軍』吉川弘文館
- 佐藤久光 2004年 「坂東巡礼の体験研究」『神戸常盤短期大学紀要 第26号』
- 佐藤博信・滝川恒昭 2008年 「房総里見氏文書集」『千葉大学人文研究 第三十七号』
- 清水谷孝尚 1987年 『坂東三十三観音巡礼・法話と札所案内』坂東札所霊場会編 朱鷺書房
- 清水真澄 1986年 「彫刻編 杉本寺」『鎌倉市文化財総合目録 書跡・絵画・彫刻・工芸編』鎌倉市
- 杉本寺周辺遺跡発掘調査団編 2002年 『鎌倉市二階堂 杉本寺周辺遺跡 二階堂字杉本912番地点』鎌倉市教育委員会
- 袖ヶ浦市郷土博物館編 2007年 「熊野社領の展開」『開館25年記念特別展 房総と熊野』
- 高橋慎一郎 2019年 『中世鎌倉のまちづくり 災害・交通・境界』吉川弘文館
- 館山市博物館 1987年初版・1988年再版 『館山市の仏像 一館山市内仏像彫刻悉皆調査報告書—』
- 館山市役所税務課資産係編 1971年 『館山市大字・字・地番早見表 昭和48年8月現在』館山市
- 玉林美男 2022年 「大倉御所(大倉幕府)跡から見た鶴岡八幡宮・段葛・若宮大路の位置と造営」の註3 『鎌倉市教育委員会文化財調査研究紀要第4号』鎌倉市教育委員会
- 鶴岡八幡宮境内発掘調査団編 1985年 『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書(鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査)』鎌倉市教育委員会
- 中野晴久 2022年 「第5章 中世陶器 第1節 東海諸窯 (3) 恵那中津川窯」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編 真陽社
- 貫 達人 1959年 「杉本寺」『鎌倉市史 社寺編』鎌倉市史編纂委員会編 吉川弘文館
- 貫 達人 1959年 「荏柄天神社」『鎌倉市史 社寺編』鎌倉市史編纂委員会編 吉川弘文館
- 貫 達人 1981年 「中世の鎌倉」『草戸千軒 No. 101』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編
- 貫 達人 1985年 「六 幕府の盛衰」『NHK 市民大学 中世都市・鎌倉』日本放送出版協会
- 真鍋淳哉 2005年 「中世初期における三浦氏の諸問題 —市史刊行の成果から—」『三浦一族研究 第九号』三浦一族研究会
- 湯山 学 2010年9月 『相模武士 第1巻 鎌倉党』戎光祥出版株式会社
- 馬淵和雄 2025年 「『吾妻鏡』の記事と遺跡からの「事実」—古典と考古学が示す二つの「真実」—」『季刊 考古学 170号 特集 考古学から古典・文学を読む』雄山閣
- 向荏柄遺跡発掘調査団 1985年 『鎌倉市二階堂 向荏柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 新村出編 1991年 『広辞苑』第四版 岩波書店
- 野口 実 2017年 「中世成立期の安房国」『京都女子大学宗教・文化研究所紀要』30巻、京都女子大学、